Y994-J3234
1200701624698

SPEIN-KA JUNAN-KI

スペイン革命受難記

の祭司一

ロンドン・コスモス社發行

一司祭の
スペイン革命受難記

ドン・ボコス社發行

スペイン革命受難記

第一章　大嵐

一九三六年七月十九日スペイン東部の樞都バルセロナに革命が起つた。私は此の事のある四日前に私と同じ司祭である友人と共に此の町を立つて〇〇に入湯に出掛けました。勿論此の際には最早や何事か起るらしい豫感は誰にもないわけではなかつたが、而も何時起るかに就ては誰も豫言し得るものはありませんでした。〇〇溫泉場に着いて見て浴客が例年の半數にも滿たないのには世人の不安が如何に大きいかを見せつけられた氣がしました。恰度其の折カルオソテロの殺人事件のニュースが出たために、それでなくとも尠い浴客の中の大部分の人は慌てゝ歸つて行つたし、歸へらないお客も大きな不安に戰いてゐたのでした。十八日には、それでも溫泉場の事とて浴客は思ひ思ひの遊びに耽つてゐる時、革命に對する最初のニュースが人々の耳朶を打つた。其の夜モロツコ

Y994
J3234
I種
W
1200701624698

に叛亂のあつた事を私は始めて知りました。

此の事のあつた翌日の日曜にはバルセロナの叛逆をラヂオが頻りに報じてアナウンサーの聲は朝から晩まで勞働者に向つて「武器を執つて起て」との指令を强調し共産黨の勝利を讃へて「近いうちに共産黨は完全な勝利を得るであらう」と叫んでゐた。そして負傷者のために看護人と醫師とを至急に募集する聲が續いた。アナウンサーの聲が聞えなくなつたなと思ふと革命の流行歌が姦しく我鳴り立てそれに鐵砲の音さへ混つて聞えて來る。此の時の私共の心配は如何ばかりであつたかはどなたにもおわかりでせう。時間はいくら經つてもラジオには他のニュースは薩張り出て參りません。私はあまり突然の出來事なのに氣も顚倒し、どんな事になるだらうかとさへも考へて見る餘裕がありませんでした。然し夜に入つてバルセロナの叛亂軍司令官ゴデ大將は脆くも共産軍の爲めに破られてしまつた。バルセロナは共産軍の一番强い所なのであります。私共は其の日曜には只ラヂオのニュースによつて叛亂の事を知つただけに過ぎませんので私等の村には別に何の變つ

た事もありませんでした。然し、すべての人は皆神經質な不安に捉はれてゐたのは事實です、それでも夜には「叛亂が治つた」と云ふ簡單なニュースが出ただけでしたが凡その人はこれで安心してしまつて或大事件勃發のこれが前哨戰であつたのだ等と氣付いた者は一人もありませんでした。

月曜日の朝私はミサを上げに行く途中で「今こそ革命が始るのだ」とのラヂオの叫び聲を聞きましたが、只それだけでラヂオは夜まで只共産主義を讃美する聲が連續して、個人の財産が共同物になるとか其の話の次には某會社が人民共同の所有になつたとか云ふ樣な事ばかり發表して放送時間を埋めてゐました。

殉教者の鮮血

スペインに今將に起らうとする此の革命は啻に社會的な性質を有つてゐるだけでなくて、宗教への迫害が如何にも慘酷に行はれようとしてゐるのでありました。それは共産政府の規則の中には、正式にはどこにも教會を破壞せよ等とは規定せられてはありませんけれど、其のしてゐることを見

れば二千年の間此の共産主義政府によるもの程慘酷な迫害は見當らない。此の日曜の日にも多くの聖堂は彼等によつて火がつけられた。月曜日にも前日と同じ事がつゞけられた。其の日バルセロナから來た人の話によれば全市中彼等の兇手から免れた聖堂は一つもなかつたと云ふ。斯うして都會や小村にある聖堂は次々と彼等の魔手が加へられ、燒燼は免れ得たにしても掠奪をまで免るゝ事は全くなかつた。建物が燒れないか壞されない時も、禮拜用の聖器は悉く失はれるのが常であつた。

バルセロナに於ては、もう聖職者に對する迫害さへも初つてゐると云ふ、修道士、修道女は修道院から追ひ出されて殺された。田舍は都會程急速には此の事は行はれませんでしたがそれでも反神司令の命によつて都會で行はれたやうな事は漸次田舍へも及んで來た。

監視者には次の樣な命令が下された。卽ち「聖職者が見つかつたならば捕へて直ちに殺せ」と。隣村に大へん愛の心の深い年寄の司祭がゐて、村人のすべてからは聖人の樣に尊敬せられてゐた。そこで其の村の村長さんは事情を話して此の老司祭を許してくれる樣に司令部に願ひ出た處が、之

に對して司令部からは「定めの通りにしなければならぬ。一番熱心な一番活躍するやうな司祭こそ眞つ先に殺さなくてはいけない」と云ふ返事が屆けられたのでした。

私は玆までは革命の勃發に就て語りましたが、以下自分の目擊した事を話すことに致しませう。

火曜日の朝の事でした。私は友人と一諸に散歩に出ましたが、急に後から自動車の音がして共產軍が迫つて來ましたが私たちは道ばたの木の影にかくれて彼等をやり過さうとしたのです。しかし不幸にも三臺目の車に乘つてゐる軍人に見つけられてしまひました。彼は拳を振り上げて「殺せ、殺せ司祭だ」と叫んで發砲しましたが自動車が餘り激しく走つてゐた爲め彈丸は私たちには當りませんでした。車が見えなくなつてしまつてから、これを見てゐた一人のお婆さんが私たちに近づいて來て「危い事で御座いました。もつと身體をかくさなくては危う御座いますよ。今もあの最初の車にでも見つかつて御覽、もう今頃は冷たくなつてゐたでせうに」と。眞にさうであつた。私たちが制服を着たまゝ外に出るのは危い事でありました。其の時丁度都合のよい事には親切に

世話をしてくれる人があつたので私たちは背廣と着換へる事が出來ました。處が此の夜亦軍人がトラックに乘つて此の村に現はれた。妙な事には此の兵士たちは上着を脱いでシャツ一枚で其の釦の止つてる者は稀だつた。そして各々違つた武器を持つて彼方此方と彷徨しながら村人たちを脅かしてゐたが、いつも最初に聞くのは教會はもう燒かれたか否かに就てであつた。そしてまだ燒かれてゐない事が確めらるゝとすぐに燒きにかゝるのであつた。村長がそれを避けようと思つて「ミサの式はもうやめさせるから」と申し出たにしても彼等は「どうしても燒かなければならぬ」と云つて聞かないので「さうですか、それでは仕方がない貴方達の自由にしなさい。しかし若しどうしても燒くのなら餘程用心しないと此の村には右傾（反共産派）の人が澤山ゐるから、あなた方が聖堂を燒くのがわかつたら決して無事に此の村から外へは出さないでせう」と注意したのです。此の一言が利いて彼等は初めの勢は何處へやら、すつかり消氣返つて聖堂の事は問ひもしなくなつた。然し困つた事には彼等が此の村を出て行く時、村内方々の食堂を慘々喰ひ荒しながら代金を拂つたものは一人もゐなかつた事である。そして彼等は共産歌を高唱しながら來た時のトラックに乘つてあたふたと引上げて行つてしまつた。村人たちは始めて安堵の胸を撫で下した。人々は村長の下に打ち寄つて村長に禮を云つたり今夜の恐怖を語り合つたりしてゐた。村人の此の安心も然し長くは續かなかつた。其の翌日私等司祭が聖堂に行つてミサを立てようとしてゐると、村に居た幾人かの共産主義者の密告によつて共産事務所長一行が押入つて來た。そして罵詈雑言の果てが司祭や信者たちに「おまへたちは茲で何をしてゐるのだ。我々はきさまたちを殺す權利があるのを知らないか、お祈りやミサ等をしてはならぬ早速出て行け」と怒鳴りながら集つてゐた信者たちを遂々追ひ出してしまつた。

此の事があつて後、此の村にも都會と同じやうに、どこの家でも窓を開放せねばならず人が集合してはならず、個人所有の武器は指定の場所に提出せねばならぬ等の命令が發せられ、これに續いて家宅捜索が片つ端から初められた。然し發見せられたものは獵銃僅かに數個に過ぎなかつた。其

の夜には今までにない多人數の共産兵がトラツクに乘つて押かけて來、人々は一切外出を嚴禁せられ特に聖堂附近に寄りつく事は嚴重に差し止められた。彼等は聖堂破壞を初めたのである。私の居る所からは祭壇を割る斧の音や地面に落された御像の音などもハツキリ聞き取られた。突然地震の樣な響が聞えた。それは聖堂の最後端にある高台からパイプオルガンの落ちた音であつた。村の人々は目の前に此の慘酷極まる有樣を見て此の世の事とも思へぬ程の愕きを感じ、見つからない樣に聖堂の近くの家々に集つて「彼等を許し給へ」と涙ながらに天主に熱禱をさゝげてゐた。夜も更けて十一時頃には破壞の音は全く絶えたが其の刹那窓越しに赤い舌がペラ〳〵と立ち上つたのには、かくれて見てゐた村人達も愕然とした。これは實に聖堂から運び出された聖具の悉くが灰燼に歸する合圖に外ならないのでした。

此の事のあつた翌日、聖堂に入つて見れば堂内はがらんどうになつて役に立つものは何一つ殘つてゐなかつた。私たちは村で一番信仰の厚い信者に賴んで聖堂の中を掃除をして貰つた。彼等は

悲痛の面持で整理してゐたが其の時の燒け殘りは遺物として今もよく保存されてゐる。

聖具の破却を遂げた共産派は、會堂の壁を打ち拔いて澤山の窓を開けた。次の土曜日からは聖堂は村の市場として使はれるとの正式な發表があつた。それだけでなく其の翌日の日曜日には此の市場の落成式と云ふ名目で盛大なダンス會が催され殊に村民一人殘らず出席する事が强要され違背する時は罰金が課せられた。此の强制に堪え兼ねた村の青年達は「此の瀆聖にどうして參加出來るものか」と、互に議をまとめて「何處までも共産派の背信に對抗する」と誓つた。共産黨は然し青年の此の決意の前には無力で何をも成し得なかつたが、それでも反宗教的な怒りは倍々加へられて行つた。

不思議な事には、共産軍の人達はよく宗教の事を知つてゐた。卽ち聖堂の中で最も大切なものは何であるかを知つてゐるものだから聖堂に入つて彼等が最初に探すものは祭壇の石は何處にあるかであつたし、聖櫃を壞す事であつた。それは祭壇の石がなければ式が行はれないものだと云ふ事を

彼等はよく知つてゐたからであつた。革命勃發の當初には教會に對する斯うした暴虐の記事が平氣に新聞紙上に載せられてゐたので私は記念の爲に之を取つて置いたが、一週間も經つた頃からは斯んな記事は一切新聞紙の上から消えて行つた。これは世人の思惑を氣にした政府の命令によるものであつた。

然しそれにしても茲に一つの疑問が殘る。當時此の地方の人々は殆んど皆熱心なカトリツク信者だつたのに何故斯樣な無法行爲に對抗して武力を以つて起たなかつたかの一事である。が其の原因は、第一に此等の人々は武器と云ふ程のものを一つも持たなかつた事、第二には共産軍は多くの武器を持ち、道德を無視して突然押し寄せ、忽ちにして此の地方の人々を虐殺したので之に恐れをなした事が主な理由と考へらるゝ。これに就ては次の樣な例がある。○○村に今年七十幾才のお爺さんがあつたが、聖堂の番人に「あなたは何故聖器の燒けるのを默つて見てゐるのですか」と問うた處が、其の番人は返事の代りに只一發の下に此の爺さんを射殺してしまつた。此の外にも聖堂の前

に機關銃を据えつけて其の前を通る人を次々と片つ端から殺してしまつた所もある程、共産軍は實に獰猛を極めてゐた。

トラツクに乘つて來た共産軍人は私たちの居る村にも押しかけて來て、村長を馘り村會議員を逐うて全部を入れ換へて共産議會を作り村の權利は否應なしに彼等によつて掌握せられてしまつた。此の議會は全く專制的であつて裁判などでも只名だけで、「怪しい」と共産軍の目から見ゆれば其の場で銃殺する權利まであつた。こんな時に一番目をつけられるのは旅行者で、旅行許可券がなくては一歩も動かれなかつた。○○村は溫泉地の事とて入湯に來てゐる司祭等も幾人か居り、修道女の經營する修道院もあつたが、此の修道院はすぐに共産軍によつて破壞され燒却されて修道女たちは散り〳〵に命からゞ〳〵漸く身を以て遁れた位だつたが奇しくも其の中の二人だけは其の主任司祭から聖コツプの中に殘つてゐた御聖体を頂いてゐたので私が毎日彼女等に之を授けに行つてゐた。他の神父達も、どうにかかうにか遁げるだけは逃げる事が出來た。それは彼等がいろ〳〵と工

天して旅行許可券を貰ふ事が出來たからであつた。

私は自分の今後の行動に就ての指示を受けたいと思つてバルセロナに居る目上の人に「何をしたらよいか」を手紙で問ひ合せたけれどなか〳〵返事が來なかつた。後になつて其の人は共産軍の爲めに殺されてゐた事がわかつた。そして私には其の代理の人から手紙で其の村で入湯がすんだら山奥の極く田舍の方にかくれなさい、決してバルセロナに歸つてはいけない。バルセロナでは共産軍が私を捜索してゐると云ふ通知が來た。それで私は七月三十日までは〇〇村に滯在して入浴しながら世の中の動靜を凝視して居りましたが、其の當時交つてゐた司祭は其の後殆んど共産軍の兇手に殪れてしまひました。今思ひ出しても彼の別れの時の感激は到底忘れる事の出來ない程深いものでありました。

〇〇村の溫泉宿に止宿しながら私はどうして世の人々の爲めに働いたらよいかに少からず惱んだのでしたが、イエズス・キリスト樣は「愛の牧者は小羊の爲めに命を捨てる事だ」と仰言る。私

も忠實に此の聖言に從はうとするのですが、宿の主人は私に警戒せよと切りにすすめるものですから私も人の深切を無にする事は神の聖旨であるまいと思つて逸る心を抑壓して時機の至るを待つ事とした。けれ共、私自身も經濟的に行き結つてゐて愚圖々々してゐては所持金は使ひ果してしまつて寢る所もなくならうし、いつ又共産軍の血祭りに上げらるゝかもわからないし、何れにしても危險は刻々に迫つて行く。最早や遁れる途とては溪谷に副うて山奥へ走り込むより外はなかつた。而も私は全然土地不案内の爲めに此の地方の風習も、道さへ知らなかつた。でも或る有力な人に奬められてフランスの國境近い一寒村に行く事となり其の人から行く先への紹介狀まで貰ふ事が出來た。然し私にはまだ「旅行許可券」がない。それに其の村も大へん遠くて旅行券がなくては行けさうにもないのであつた。それで先づ何よりも旅行券を貰はねばならないので私の主治醫の所へ行つて「私は此の村に入湯に來てゐたのでしたけれど、お湯が體に適はないから山の方のお湯に行きたいから」とて僞名で診斷書を作つて貰ひ之を共産軍の事務所に見せて旅行許可券をまん

きと貰ふ事が出來た。幸にも私が司祭である事を知つてゐる人が誰も居なかつたので仕事は滯りなく運び、私はそれを持つて其の翌三十一日、名殘り惜しくも此の村を離れて奥地へと向ひました。

第二章　彼等から逃れて

共産軍の嚴重な檢べに引つかゝつてはならないと思つて、私は友人にお祈り本と十字架とを預けて置いた。そして身分證明書は新調の袋の中によくかくし、コンタツは鞄の底に入れた。始めの幾日かの旅行は別に何事もなく過ぎた。檢査の時には只旅行許可証を見せるだけで足りた。〇〇村に辿りついて其處で又其の村の管理者の認印を押して貰はなくてはならなかつた。其の爲めに共産會議所に出向いたが此處で夢にも思はぬ悲慘な出來事を見た。それは一人の女が裁判官の代理となつて裁判を聽いてゐた、その時の場面である。

共産兵「私等は〇〇村の神父を捕へたがどしたらよいでせうか」

裁判官の女「何も彼も彼の物を取つたのか」

兵「取りました」

女「聖堂も燒いたか」

兵「はい燒きました。殘つたのは僅かの燒け殘りだけです」

女「神父はどんな人だつたか」

兵「まあよい人でした」

他の一裁判官「それならばよく鞭つてから放免してもよからう」

女（怒つた顏付きで）「共産軍の革命とは何を指すのか、すべての神父を殺さねばならぬと云ふ事こそ我等のモットーではないか。だから其の神父も殺すべきである。あゝ私は死刑を宣告する權利が得たい」と叫んだ。

議長（女に向つて）「司祭の命なんてさう大したものではないだらうから殺したければ殺してもよいだらう」それは司祭の生命を禽獸の生命程にも思つてゐない樣な言ひ分である。

女（自慢振つて）「あゝよかつた。私の思ふ通りにして彼を殺してやらう」

そして、どんな方法によつて神父を殺すかに就て彼女は人々に詳細說明してから其の室を出て行つた。此の裁判に携つた裁判官たちは「彼女は私等よりも共產熱に燃えてゐる」と驚いてゐた。

どこの村でも斯うした女の幾人か居ない村とてはなかつた。惡性な生活をしてゐる女が共產軍の仲間になつた時が一番慘酷な處刑を平氣でやつてのけた。或る女中の如きは平素其の主人を恨んでゐたが共產黨蜂起の機逸すべからずてふ考へから共產黨に讒訴して裁判にかゝるや狂人を裝うて主人に對しピストルを擬して「此の問題は斯の通り解決しなければ駄目なのだ」と云ひ樣、只一發の下に主人を射殺してしまつた。又〇〇村では神父が平服を纏うて逃げ場を探してゐるのを見つけた斯うした不逞極まる女が、「神父だ〳〵早く殺せ早く〳〵、神父だ〳〵」と叫んで遂々共產軍の魔手

の爲めに憐れな最後をとげた。こればかりではない。バルセロナに於ては一人の神父を訴へ出た者には五百乃至一千ペセタスを賞とすると云ふ神父の首に懸賞を附して屢殺を企圖してゐるため、賞金の欲しい手合は信者に紛れて熱心な信者を訪問して重病人でもあるのを發見すれば親切ごかしに「神父を搜してやる」と云ふ口實の許に神父の居所を嗅ぎ出しては之を共產軍の手に渡すといふ惡辣な非人道極まる輩も簇出した程である。

私が〇〇村に着いた時にはまだ其の村には革命の慘禍は及んでゐなかつた。敎會もまだ燒かれてはゐなかつた。それでも宗敎的な會合は一切嚴禁せられてゐた。私が此の村に着くとすぐに共產黨員が訪問に來た。然し私はバルセロナの商人に變裝してゐたために幸にも別に何も危害を加へらるゝやうな事もなくて濟んだ。そればかりでなく秘かにではあつたが其の村の神父とも遭ふ機會が惠まれた。其の時敎會にはまだミサを立てらるゝ場所が殘つてゐる事實もわかり、又其の翌日は私の靈名の聖人の祝日にも相當してゐたので神父にお願ひして翌朝早くミサを立てさせて貰

ふ事が出來た。これこそ私に取つての最後のミサであつた。と云ふのは、其の習日に村の共産黨員は動乱を起して教會に對しても、先日まで私の滯在してゐた村と同樣な瀆聖行爲が所嫌はず繰り返へされた。そして其處にあつた祭服を盗み出しては村の子供達に着せてフザケ散らし、若し子供達が親から叱られるのを恐れて着るのをいやがれば「大丈夫だよ、後の事は私たちが知つてゐるから少しも恐れる事はない。」と無理に着せては興じてゐる。此處は田舍の事とて、これ迄は教會は少しも損はれずにゐたのに、たつた一日の中に此の近所の教會は悉くが燒き盡されて仕舞つて夜には聖堂の燒ける炎が天を焦し遠方からでも之を望むことが出來る程であつた。此の折なら私が國境を越えてフランス領に遁れる事は大して困難な事ではなかつたのだが私には果さねばならぬ使命が與へられてある事を思ふとそれも出事ずに其のまゝ此の村に止まることにしたのであつた。それは到る處から「司祭が捕へられて殺された。」と云ふニュースが耳に入るので牧者に捨てられたそれ等の羊のために少しでも働きたいと考へたからでした。それに又そんなに慘い迫害はさう

永く續きはしないだらうと考へたからなのです。それで其の内には又バルセロナに手紙を出して、若し出來るならば、バルセロナへ歸る相談も進めたいと思つたのでした。斯うして待つてゐるうちに私は此の村の共産議長に呼び出され身分調べが行はれる事になりました。然し私は旅行許可証と主治醫の手紙とだけしか持つてゐなかつたので議長は「バルセロナから『他所から來た者は絶對に入れる事はならぬ』と云ふ通知が來てゐる。もし保證してくれる人がなかつたら一時も早く此の村を立ち去らねばならぬ」と云ふ退去命令を受けた。私は實際途方に暮れた。けれども幸な事には旅館の主人が保證してくれる事になつたので此の場は其のまゝで濟す事が出來た。私はバルセロナからの返事を首を長くして待つてゐるが何の音信もない。待ち草疲れてゐる時次の樣な手紙が着いた。曰く「若し病人が當方へ參りますなら病人は吃度死ぬるでせう。それだけではない。昨日隣の人が私の家に病人をかつぎ込んだが、其の夜の中に病人も家族の人も皆死んでしまつてゐた」と云ふ謎の樣なものであつた。これは私が司祭である事を知られない爲めに、若し途中で

調査せられても無事なやうに隱語が使つてあるのです。即ち之は「若し私がバルセロナに歸へれば必ず殺されるであらうし、又司祭を家に祕した者は皆同罪に處せられるからであります。事はそれだけに止らず、バルセロナでは私はとても嚴しいお尋ね者になつてゐるのであつた。それで私は一應田舍に住んでゐる兄の所へ行かうと考へた。がそれにしても兄からは近頃ちつとも便りが來ない。後になつてわかつた事だが兄も其の村に居られなくなつて逃げ出してゐたのであつた。そこで私の知る或る人からのすすめで其の人の家に厄介になる事となり八月十三日私はバスで其の人の家を訪ふ事とした。途上〇〇村で調べられ旅行券を出して見せたがそれだけでは不充分で身分證明書が必要であつた。同車の人々は皆出して見せたけれど私はそれを持つてゐなかつた。私は「私は旅行許可書だけで大丈夫と思つてゐましたのでそれを持つて來ませんでした」と言譯したら「あなたは吃度司祭に違ひない」と云ふ。私は懸命に「私はバルセロナの學校の教師で決して司祭ではありません」と云うて見るが、對手は「いゝえあなたはきつと司祭です。司祭は自分の身分證明書さへなくしたら司祭だとは思はれないと思つてゐるか知れませんが、あなたはもう旅行を續ける事は出來ません。そして近いうちに殺されるでせう」と仲々聽かない。「一寸待つて下さい、こんな重大な事を證據もないのにどうして斷言する事が出來ますか。早く査證して下さい早くしてくれなければ私は乘り後れてしまひます。私に何の惡い證據がありますか」と私は氣が氣でない。然し對手は冷やかに「結局殺す證據を見せてやる」とて引き立てられた。でも私の司祭たる證據は遂々見つからなかつた。私の財布は取り上げられて中味はすつかり調べられた、それなのに幸にも其の中に入れてあつた司祭の身分證明書には遂に氣がつかなかつた。守護の天使の特別の御保護に違ひないと思ふ。私はポケットにコンタッを入れて居た、一人が之に觸つて「之は何か」と云はれたのにはギクッとした、愈々終りだと思つて「それはコンタッだ」と答へようとしてふと見れば、それは外の物を指してゐるのではないか。私の此の時の感激つたらない。「出して見せませう」とポケットの中から小さな鉛筆を出して見せて「之だ」と答へた。若しも、もう一分下

に觸られたらコンタツを見付けられ今頃は私は冷たく野晒しに遭うてゐる事でせう。其の時、他のもう一人が「カバンを調べねばならぬ」と云つた。カバンは隈なく調べられたが別にあやしいものは出て來なかつた。そこで議長は「どうしてあなたは身分証明書を持つてゐないのですか」と其の理由を聞いた。私はすぐに「私は反亂の起つた折には家に居ませんでした。こゝに醫師の證明書があります」と出して見せた。どうしても證據となるものが何にも見付からないので共産議長も仕方なしに私を放免してくれた。私は漸く間に合うてバスに乘る事が出來た。乘つてから隅の方に隱れて財布をよく調べて見たら司祭としての身分證明書は決して失はれてはゐなかつた。私は大急ぎで之を小さく裂き破つて窓から捨てた。もしもこれが見つかつてゐたらと思ふと、ゾツと覺えず見震ひした。汽車に乘らうと思つて驛に來て見れば此處でも亦調べが始められた。調べてゐる中に一枚の名刺を見つけ出した役人がゐたが、其の人は名刺に刷られてゐる「司祭」と云ふ肩書に遂々氣づかずにしまつた。誰にでもわかる此の言葉を、彼が氣付かずに元の財布に入れ戻したの

は實に不思議に堪へない。調べも濟んで汽車に乘り込んでほつと一安心してゐると、突然後ろから叮嚀に挨拶したものがある。こんな所を旅行するのは私は最初の事ではあり殊に服裝も今迄と違つて普通人の着る脊廣なのに、私を知つてゐる人があるとは油斷のならぬ事だと注意深くふり向くと、それは汽車の役人でバルセロナで知り合つた一人の信者であつた。彼は「いくら脊廣であつても、私が氣が付く樣に外の人にもわかるのですから餘程注意しないと危險ですよ」と囁いた。そして「昔の信者の中には信仰の熱が冷めてゐる人もあるのですからよく隱れておいでなさい」とも注意してくれた。隱れる等とそんな卑怯な事が、とは思ふが他に方法もない。それでも私は漸くの思ひで目的地に辿り着く事が出來た。然し私を招いてくれた人は私の姿を見て、歎く樣に「友よ、何もかも以前とは變りました。あなたを御招待したものゝ今はあの當時とは違ひ斷えず危險の中に曝されてゐます。若しも見つかつて調べられたら私たち一家は皆殺しにされてしまひます。あなたの爲めにも私達のためにも此處に居るのは大きな危險があります」と訴へる。私も

全く迷つてしまふ。兎に角今晩だけの約束が出來て寢かせて貰ひ、寢ながらも明日の手段を熟慮する。此の地に逃げて來てゐる人は他にも二三人あつたから私の立場はとても危險になつてゐた。それだけでなく旅行許可券の期限も其の日で終りになつてゐたから新しいのと取り換へねばならないのだけれど、取り換へる爲めには自身で共産黨に身を委ねるやうなものではないか、とは云へ方方で許可證なしに旅行してゐて殺された人の噂は頻りに聞えて來るではないか。昨日も一人の老人が捕へられて調べられた處が彼は二人の司祭の父である事がわかつて其の場を去らずに殺された。私はそれだからとて此のまゝ永く此の家に泊るわけにも行かぬ。そこで私は友なる此の家の主人とよく相談して此の近くに杉と樫の生ひ繁つた深い森林がある其處にかくれるより外には方法がなかつた。それで八月十五日に私は此の奥で隱遁生活を始めたのであつた。木の枝を集めて小さな小屋をつくり晝は此處にかくれて住み夜こつそりと這ひ出して友の家で食事をし就寢してゐたが、それでも此處だとて全く安全な所とはいへない。私のかくれてゐる所からはよく鐵砲の音が

聞えて來た。或日私のかくれてゐる近くに一人の男が逃げて來たが私の居るのには少しも氣がつかない風であつた。突然立ち上つて「兵隊が上つて來る」と叫んで又逃げていつた。私も之は危險だなと思つたので外の場所を探さうと出かけようとしたら私の名を呼ぶ者がある。ふり返つて見れば一人の百姓が近づいて來る、そして「私を御存知ですか」と云ふ、「いゝえお目にかゝつた覺えがありませんが」、「さうですかマンレーザで去年聖イグナシオの說教をなさつたのはあなたではありませんでしたか」、「さうでした、それは私でした」「あゝさうですか。私は其時あなたと一緒に居たのです。斯んな時に斯んな所で友に會ふと云ふ事は何と云ふ大きな喜びでせう」茲で私たちは久しぶりの邂逅を喜び合ふ事が出來たが、それにしても差し迫る危急を避ける方法を先づ考へねばならぬ。彼はフランスに逃げようと思つてゐたのだが二人相談の結果それはやめにして私の小屋の近くに彼も小屋を建てゝ隱れ棲む事にした。理學士である彼は早速ラヂオを作つて方々のニュースを聞くことが出來た。只此の隱遁生活で一番淋しい事は司祭としての信心の行を果す事

の出來ない事だけだつた。ミサも聖務日禱も全然不可能の事であつた。私はローマの友に手紙を出したが返事は來なかつた。私の泊りに行く友の家で數冊の信心の本を見つけ出して之によつて毎日の務めをどうにか果すことの出來たのがせめてもの慰めであつた。

斯うしてゐるうちにだん〳〵冬が近づいて來て朝夕はとても寒くなつたので私は此の小屋に住むことが出來なくなつた。友達が之を心配して家蓄小屋に住ましてくれた。此處で一ケ月餘り住んでゐたが一寸も安心する事が出來なかつた。それは斷へず探査が行はれて私はいつ捕へられるかわからぬ危險に迫られてゐることを知つてゐるからである。私の耳には毎日の共産軍の慘酷な迫害の話が聞えて來る。其の話の中には次のやうなものもあつた。

（一）此の村から一里程離れた所に一軒の家があつたが、一人の司祭が其の家にかくれてゐると云ふ見込みで共産軍に攻め立てられ家人は一人殘らず捕へられた。そして其の家にあつた道具で宗教に關係のあるものは悉く燒き拂つてまでも調べて見るが、いくら調べても訊問しても司祭は

見つからない。そこで「若し司祭を渡さなければおまへたちを屠殺にする」と脅して見るが一向利き目がない。其の脅し樣と云ふのが戸外で鐵砲の音をさせてから一人が家に入つて來て家の女に血だらけの布片を見せ「見よこれはおまへの主人の血だ、今殺したばかりだが、もしおまへが司祭の居所を白狀しないならおまへの子供も一人殘らず殺してしまふぞ」と云ひながらもう一度發砲して見せると云ふやり方であつた。女に對してやつたのと同じ方法が主人にも試みられてゐた。そして血も今までは幸にも兎の血を以て脅しの具に使つてゐたが、遂に一人の子供が「司祭一人居たけれど昨日家を出て行つた」と洩らすに到つた。其の司祭は後に自分のために其の家の人々が迫害されてゐる事を聞いて大へん氣の毒に思ひ自ら進んで体を共産軍の手に渡したが、共産軍ではすぐに此の司祭を銃殺してしまつた。

（二）共産黨員は或百姓が屢々自分方の葡萄畑に出入りするのを見て何事があるのだらうかと思つてゐたが、或時急に葡萄畑にあつた小さな小屋の中に飛び込んで行つて其處にかくれてゐた二

人の司祭を其の場で殺してしまつた。

斯う云ふ様な出來事は、次から次へと近所でも毎日の様に繰り返されてゐたので、どうしても安心の出來る事ではなかつた。それでも動く事は更に危險なので私はそのまゝ家蓄小屋の中で兎と鷄を合手に十日間の默想を始めた。默想が終らうとする日の出來事であつた。急に釣鐘の音が聞えて來たが之に引きつゞいて鐵砲の音も聞えて來た。それと殆んど同時に此處の主人があわたゞしく走つて來て「神父さん神父さん、早く早く、早く逃げて下さい、今共產黨員が教會の釣鐘をはづしてゐる處です、それがすんだら私の家の搜索が行はれるでせう。もし其の時あなたが見つかつたら皆殺されてしまはねばならぬ」と。勿論私は其のまま森の奥に逃げ込んで夜に入つた。私が逃げてから間もなく私のかくれてゐる場所の嚴重な調べが行れ、共產黨員は主人を捕へて隣の驛まで壞れた釣鐘を運ばしたのであつた。鐘はバルセロナに送つて其處で爆彈にするのだと云ふ。神の愛と人間に對する神の慈しみを告げてゐた彼の鐘は、今や惡逆を行ふ爲めに使はれてしまつた。

のである。あゝ。

第三章

さすがの共產黨政府も地方に行はれた餘りにも悲慘な出來事に遂々目を掩ふわけに行かず、指令を發して「政府の命令によらずして無謀な殺戮を行つてはならない」と命ずるに到つた。そこで私は山小屋から出て友人の家に住む事になつた。それでも尙私は常に隱れてゐなければならなかつた。若しも見つかつたら役人によつて死刑にされる恐れがあるからです。此の家には子供がをつたので私は此の子供等に讀方を敎へてゐて餘り退屈する樣な事はなかつた。然し客が來るやうな事があれば逸早くかくれるのが常で、どうかすると子供が客の前で私の事を云ひ出すやうな事があつたが其の度に家人がうまく口實を設けて辻妻を合せ話頭を轉じてくれて辛じて事なきを得てゐた。

諸聖人の日は大喜びであつた。此の家に赤ん坊が生れた。私は之に洗禮を授けた。然し日增しに私の立場には危險が迫つたと感じる樣になつた。私は出來るだけ早く私の身分證明書類を作らねばならなくなつた。私は只今自分の鄕里から十キロ程離れた所に居るのだが、鄕里の共產黨議長が私の竹馬の友であつたので私は此の人に賴んで作つて貰はうと思ひ宿の主人にわけを話して行つて貰つたのだが、間もなく歸つて來た主人は顏色を蒼白にして其の語る處によれば私の鄕里には大亂が勃發してゐる。それは議長が餘りやさし過ぎると云ふので黨員達が叛亂を起したと云ふ事であつた。これは私の力の及ばない所だ、仕方がない。只私は自分の近況を家人に知らせたいと思ふ。それで父に宛てゝ手紙を出した。そしたら一週間程してから草取の格好をした二人の男が私を訪ねて來た。之は私の兄弟で私は忘れる事の出來ない自分の兄弟とかうして懷しい對面をする事が出來たのでした。彼等の語る處によれば共產黨の慘酷さは噂にまさる辛棘なものでバルセロナにある私の家も完全に燒却され、私は搜索を受けてゐるのであつた。斯の危險

な狀態の中にあつて、私の兄弟は私の身分證明書を作るためにとても活動してくれ一週間程かゝつて遂々一枚の身分證明書を持つて來てくれた。此の身分證明書によると私はバルセロナの或る建築技師の奉公人と云ふ事になつてゐる。

七月の終りの頃、或人が仕事を賴みに來た。此の人は十里ばかりも離れた遠い村で商賣をやつてゐたので革命の勃發と聞いてすぐ逃げる事が出來たのだつた。それで今は素知らぬ顏して畠仕事に精出してはゐるが、心の中は共產黨の調べを極度に恐れて自分の家にはなかなか寄りつかなかつた。二ケ月經つても三ケ月經つても別に變つた事も起らない。此の分ならば大した事もあるまいと思つて四ケ月の後夜を選んで秘かに村に入り、用心を重ねてわが家に近づき漸くの思をして愛する妻子と逢ふ事が出來たのであつた。

それは十一月十六日の事でありました。此の日は先日生れたばかりの子供の出產祝を朝の裡に濟して此の家の人々は打ち揃つて畑に出で門は締めて置いたのでした。人々が出て行つてまだ五分

經つか經たぬに、けたゝましく奥さんが駈け上つて來て「共産黨員だ、共産黨員が來た」と愕きあわてながら叫んだ。私は此の時、こゝの二階に居たが、恰度居合せた此の家の若者が「早く逃げて下さい、下では今調べが始りました」と云ふ、然し困つた事には隠れる場所がなかつたのです。それに身分證明書にもまだ私の名前が記入せられてないので之を役立てる事も出來ない。もし私一人の事ならやむを得なけりや自首してもよいのだが、さうしたら、私を今まで隠してゐた理由によつて此の家にまで累の及ぶ事を考へて、もう逃げらるゝだけは逃げるより外に方法はなかつた。窓から飛び下り様と思つてひよつと覗けば下には二人の見張番が立つてゐる。これはいけないと裏のベランダに廻ればこゝは十米以上の高さで到底無事に飛び降れさうにない。室内をうろ〳〵して見るが隠れ場所らしいものは見つからない。ベットの下、タンスの中、どこを見ても安全だとは思へない。グズ〳〵すれば共産兵に見つけらるゝ。萬策は盡きた。再びベランダに駈け出て愈々飛び降りようと先づ毛布を投げ落したが、餘りあわてゝ投げた故か、役に立たず、飛び降りた自分は強か腰を打つて死んだやうになつて動けない。手の皮はすりむけて血は流れる。上からは「早く逃げなさい早く、向ふの森の前にある堀に隠れなさい。共産黨員が歸つたら窓に白い布を張るからそしたら歸つてお出でなさい」とせき立てる。逃げたい、このまゝでは大へんな事になる、と氣ばかりは焦つても身體が云ふ事を聞かぬ。一方の足は全く役に立たなくなつてゐる。それでも「殺されたくない」と云ふ一心は遂々私を濠にまで腹這はせた。物影一つない所を四十米餘りも、手は痛み足は痿えて苦しみ悶えながら腹這うて逃ぐる四十米餘、眞に守護の天使の守りなくしてこれが出來得ようか。動けないか、敵に見つかるか、これこそ此の折の當然の成り行きであつた筈、と思ふと感謝の涙は滂沱として溢れ落ちる。ふと氣がつけばすぐそばで人の聲がする。見つけられては一大事と身を潜めて聲のする方を覗へば、それは普通の茸取りであつた。革命の一つの規則によつて絶對に武器と犬とを携へて獵に行つてはならない事になつてゐる。おかげで私も彼等に見つけられずに濟んだ、もしも犬でも連れてゐたならかくれる事は決して容易ではなかつたら

う。私は更に天主の御惠みに感謝をさゝげずにはゐられなかつた。動かない事二時間ばかり、此の間も身體中そこゝ斷えず痛んでゐた。私はよく讀んだ殉教記に自分の現在が似てゐるのを感じて心の中はとても大きな喜びに浸つてゐた。これで私如き者も聖主のために少しは苦しむ事が出來たと云ふ喜びで一杯になつた。二時間ばかりして茸取がむかうの方へ行つたので私は近くにある丘に這ひ上つて家の方を見たがまだ白い布は其の家の窓にはかゝつてゐなかつた。其の家から洩れる話聲は私のかくれてゐる所までもよく聞えて來るのに合圖の白布はなぜ出してくれないのだらうか、共産黨員たちは何處へ行つたのだらうか、私は不安ながら少しづゝ家の方に近づかうとした其の途端に　十人ばかりの共産兵が又どやどやと家の中に崩雪れ込んだのにはびつくりした。二三分してから鐵砲をかついだりして家から出て來たが、見れば自分の居る方に向つて來るではないか。驚きあわてゝ、ころぶ樣にして場所を變へ、さて此の新しい隱れ場から元隱れてゐた處を見ればこれはどうだ、自分が十分足らず以前まで隱れてゐた所を調べてゐるではないか。私は

背筋に氷を入れられた樣にゾツとした。あつ之はどうだ、首を上げて見れば又自分の居る方に向つて來てゐるではないか。これは此の附近に自分が隱れてゐるのを知つてゐるのかも知れぬ。何と云ふ恐ろしい事だ。私は又逃げた〳〵這ひつ轉びつ。有り難い事に、そして遂々彼等に見付けられずに濟む事が出來た。私は心の底から感激にふるえた。其の夜になつて身體の痛みは晝間と違つてこらえられない程うづく。其の上夜は寒さが酷しくて屋外で過す事が出來さうにもなかつた。然しそれだからとてどうして逃げたらよいだらう。所詮もう一歩も動けさうになく、近所に知り人も居ない。晝間恐ろしさに一生懸命だつたので逃げて〳〵こゝはもう一番近い村でも二里はある。いやでも二里は動かねばならぬ。山道ばかり、動かぬ片足を引ずるやうにして、而も何人にも見つからないやうに用心深く、木の枝を杖にハンカチを繃帶にして、跛引き〳〵、それでも眞夜中に燈の見ゆる所まで辿り着いた。用心して近づき、門をたゝくと中から聲がして「誰か」と聞く。私は隣り近所の人に氣付かれないやうにと思つて私の父の名前を告げた。そしたら中からは奥さんの

聲で「私はそんな人は知りません」と戸を締めてしまつた。其のまゝ立ち聞してゐるとも知らず内では「〇〇ぢいさんと云ふがさうではないらしい」等と話し合つてゐる。さうしてゐるうち四人の男が上から下りて來て用心しながら戸を明けて私に近づき、小聲で「誰ですか」と云ふ。それで私も今度はほんたうの名を告げて、どうしてこんな格好で來たかと云ふわけを話した處が、彼等は驚いてゐた。それも道理、彼等はもう私は殺されてしまつたものと思つてゐたのらしい。私は此の人々には二十年振りの邂逅であつた。彼等は懇ろに私を助けて二階に導いてくれ直ぐに怪我の手當をしてくれた。初めの興奮も次第に收まつて私は落ついた氣持で、「今まで斯うして都合よく逃げ了せ情深い人の看護を受ける事の出來るのも皆之は天主様の御保護による」と語れば、彼等は感心して「眞にそれは天主の御保護の賜に相違ない。たつた今も、あなたがお出でになつた時に家のモーターが動いてゐたので其の音に紛れてあなたの來た事は近所の人に氣づかれないですんだのです。然しこゝでも頻々取調べが行はれます。それに私の從弟に當る者に司祭が一人ゐ

るため私の家も常に嚴しく警戒されてゐるのです」と。私は實はこゝこそは安全地帶だとばかり思つてゐたのに、此處も亦油斷のならない處であつたか。私は此の夜のうちに直ぐに地下室を私のかくれがとして降りなければならなかつたが、此の家の人々は非常に熱心な信者の家で司祭の來た事をとても喜んで待遇してくれた。此の家の十人の若者は老夫婦の誇りであつた。と云ふのは彼等が忠實溫厚な神の僕であつたからであるが、現在では公に宗教上の務を果すと云ふわけには行かないので毎晩家中の者だけでコンタツを唱へるのを唯一の神への奉謝としてゐた。此の家の習慣としてコンタツの後にはきつと靈的讀書をしてゐたが、私は寢ながら暇々に子供に公教要理の說明をするのを樂しんでゐた。醫者を呼ぶ事は危險である爲家の中で私たちが自分で私の傷の手當をして忍んでゐた。斯うして一週間は瞬く間に過ぎて行つた。私も父に自分の現在の狀態を知らせなくてはならないので私の從兄の夫人に賴んで父の所まで行つて貰つたが私の親類の家まで着いた時、其の家の中から大きな聲がして「若し彼が何處に居るか告ないならば此の家の物を

沒收するぞ」と脅かしてゐる。從兄は大へん勇氣のある人でしたものですから恰度物賣りの樣な格好して戸を開けて入り小聲で私の事を囁いた。

二三日經つてから夜半に私が元居た家の主人が訪ねて來て私が逃げた時の事を詳しく話してくれた。其の話によれば、彼の時共產黨員が來て『おまへの家に誰か他所の人が居るか』と云ふので『一人だけ雇人が居ります』と答へたら『其の人に逢はう』と云ふのです。さうして皆一緒になつて探したのですが其人は風を喰つて逃げたものと見え、どんなに嚴重に搜索しても到頭見つかりませんでした。隣家で聞き合せて見ると『誰か窓から飛び下りたやうであつた』と云ふ事だけはわかつた。そこで更に嚴重に探査が續けられたが結局得る所はなかつた。それで『窓から飛び下りたのが此の家の氣の變な雇人だつたのだらう』と云ふ事になつたが、それでも彼等は諦めかねると見えて『彼が何處に逃げたかは略々見當がついてゐるのだから見つけ出して殺してしまはねば承知が出來ない』とて、其の時私のかくれてゐた所を探しに來たのであつた。

此の家の人々は大へん私のために心配してくれて、今頃は見つけられて殺されて居はしないだらうか、と氣にかけて、さてこそ私の今の隱家を探して私の安否を確め彼の時の事情を知らしてくれたのであつた。それと前後して其の家に對する共產軍の搜査は一入嚴重になつた。之はバルセロナから逃げて來た司祭を見つけ出さうためであつた。そして遂に其の雇人の書類を發見する事が出來たがそれは滿足に値する程のものではなかつた。彼等が探す者は此の奉公人ではなかつたからである。業を煮やした共產軍の頭は、此の主人に對して「今から八日以內に此處らに遁げて來てゐる司祭の居所を知らせなければおまへにひどい罰を與へるぞ」と實に無理な事をいふ。

これだけの樣子がわかつて見れば、私がいくら名を僞り職を代えて見ても、共產黨員の追究にはとても敵ひさうにない。現在持つてゐる家名も身分證明書も今では反古と同樣ではないか。たとへこれが役立つたとしても、私のかくれ場がわからないとすれば前居た家の主人が、危險に陷る事になるではないか。「さうだ彼等を救ふ爲めに私は一と思ひに自首して出よう」と決心した。

然し主人は「それは駄目です、いくら自首して出てあなたが刑罰をお受けになつたからとて其のために私の危險が除かれるわけではないのですから。あなたが私の家に居たと云ふ證據はないのですから、これはあなた一人の問題ではないです」といふ話。私は祈つた。熱心に祈つた。そして次のやうな事を目論見で見た。即ちバルセロナのスタンプのある手紙を書いて、それに出鱈目の新しい住所を書き入れ、之を其の主人に宛て、中には「あなたは私に對して甚だ冷淡な人ではありますが度々私の手紙を受け取つて下さるのを感謝致します。しかし今私は次の所に宿を見つけましたから、どうぞ私の手紙は肩書の場所にまわして下さい」と云つた樣な手紙を此の主人宛に送る事である。此の計劃は圖に當つた。此の手紙は共産黨員によつてしらべられ、宿の主人は私から手紙を受け取つた事の說明が出來、其れから後は調査も行はれなくなつた。斯くて私は漸く虎口を脫し得て安堵の胸を撫で下したのであつた。

第四章　狼の中に

私は此〇〇の家では家人が大へん親切にしてくれるので何の不安もなく厄介になる事が出來てゐたが、生憎此の家の隣りには熱狂的な共産主義者が居るために斷えず私の平穩な生活は脅かされ續けてゐた。それで私は此の深切な家を離れて私の兄の家に行く事にきめた。此の家は熱烈な共産主義者の環境の中にあつたが其の爲めに却つて危險も少かつたので、特に周到な警戒をする必要もなく十一月二十一日の夜それでも惡天候を幸に出かけたのであつた。然し負傷した足はまだなか〳〵痛んでとても進めさうにない。そこで遂々騾馬を傭うて之に乘り、用心して山道を選んで進みながら、私は斷えずお祈りをつゞけた。餘程進んだつもりなのに、此の途中で出逢ふ約束だつた父にどうしても出逢はない「これはおかしい、道を間違へたのではあるまいか」と不安の氣はだん〳〵濃くなる。彼方、此方と道を探して見ても闇さは闇く道は不案內、私は心から熱

烈に祈りつゞけた。二時間ばかりも斯うして不安な中に熱禱をつゞけてゐると人の氣配がしてやがて二つの人影が近づいて來るのが朧氣ながら感ぜらるゝ。私が馬の上に耳を聳てながら覗つてゐるとも氣付かず「どこに行つたんでせう」と話してゐる。そして私の咳の音に氣付いたらしく二人は私のそばに寄つて來た。これは私を迎へに來てくれた人であつた。けれども案ぜらるゝ事は父に出逢はない事であつた。父は七十五才の老人で、此の眞夜中の山中にゐる事はとても危險である。それだから二人の中の一人は父を探しに行つて貰ひ他の一人には私の驟馬を兄の家に連れて行つて貰ふし私は唯一人で、今度は公道を歩いて進んで行つた。若し自動車に逢ふやうな事のあつた時には道端にある物の蔭にかくれて對手を遣り過して難を避けたが、今では心も割合に落ついてさ程に狼狽する事もなく漸くの思ひで村に入る事が出來た。村の入口を流るゝ川水で足を濯ぎ近くの山懷に穿たれた洞穴にかくれて兄の家に入ることの出來る機會を待つ事にした。さうしてゐるうちに兄が迎へに來てくれ暗闇を縫うてこつそり兄の家に辿りつく事が出來た。其の時此の家の二

階から電燈が三度明滅したのでこれは安全を知らせる合圖であつたので私たちは安心して家の閾を跨ぐ事が出來た。家に入つて先づ母に逢ひ他の兄たちにも逢うたが先だつものは唯涙ばかり過ぎにし迫害と戰つて今茲に無事に懷しい親兄弟と抱擁する事の出來る機會をお與へ下さつた神に涙と共に只管なる感謝を捧げるのでありました。村人は誰一人として私を見た者とてはなく、それに村の始んど悉くが共産黨員である此の村に、まさか司祭が逃げて來ようなどゝとは夢にも考へてゐなかつたのであらう。兄は私を奥深い部屋に連れて行つて「今からあなたは此の部屋に居なさい。イエズス樣の傍にね」と云つて出て行つた。私の陣取つた隣の部屋にはずつと前から一人の修道士が逃げて來てゐて御聖體を持つてゐた。私は一時も早く自分の傷の手當をしなければならぬと思ふのだけれど、醫者を呼べば自分の身柄を敵の手に渡すやうなものだし、どうしたものであらうかと兄にもよく相談して見ると兄は一つの工夫をして或る醫者の所に行き世間話など雜談をしながらそれとなく「私の田舍に居る知人で怪我してゐる者があるがどんな手當をしたらよいものだらう

か」と何氣ない風で而も詳しく聞いて歸つた。私はこれによつて秘密に傷の手當をしてゐたが幾分輕快した。斯うなつて見れば何よりも氣になることはミサを立てる事であつた。それには葡萄酒の用意はあつたけれども殘念な事にはオスチアが無い事であつた。恰度其の時此の村に病人の看護に名を借つて一人の修道女が隱れて働いてゐる事を見つけた。私は其の人にお願ひしてオスチアを分けて貰ふ事が出來、こゝで始て念頭のミサを立てる事が出來た。それは恰度初代教會の場面に酷似したものであつた。即ち迫害の際の特別の許しによつて私は特別なミサを行ひ、兄が御聖体を箱の中に納めて之を彼の修道女たちの所に持つて行き之を院長が皆の者に授けてゐたのであつた。此の當時の出來事であるが、涙を流させる程に感激の場面も折々人々の心を打つた。或時の如きは一人の修道女が、他の村に御聖体を持つて行くやうに選ばれた。此の修道女は尊い自己の使命を果すために汽車に乘つてゐた處が、其處に突然多數の共產黨員が乘り込んで來て車中亂暴狼籍の限りを盡し「一切の宗教を絕滅しなければやまないのだ」と罵り騷いでゐる。彼女は此の時昔の殉

教者がしたやうに、自分の信仰を告白して殉教しようかと思はぬではなかつたけれど、唯今の使命の重大さを考へ、御聖体に對する非常な瀆聖が行はれるであらう事を想像して見ればそれも出來ず、默々として泪の裡に辛棒をしつづけた。又或る日兄が修道院に行つた時の事、此の修道院の近くにも一人の司祭が居て、彼にも修道院から御聖体が屆けられてゐた事を知つた。此の司祭も大へんミサを立てたがつてはゐたのだけれど、「まだ時機でない」とて許されなかつたので其のまゝじつと我慢して待つてゐるのでした。それで私の兄が私の模樣等を種々と說明して上げたらしいのですが、どうしたものかそれからは一度も修道院にも顏を出さないらしい。

私の立てゝゐるミサのやり方はとても變つてゐて、それは恰度初代教會の時代にロ！マの迫害を避けてカタコンブにかくれてやつてゐた時のやり方と餘り大した違ひはなかつた。私の室の中で、普通の机の上で、一つのコツプと一枚の皿とある只それだけで行つてゐたのであつた。それでさへも此の當時にはイエズス・キリストが私の中に蘇へつて居られた事を私は覺えてをりま

す。私は實は多くの人々に宗教の惠みを與へたかつたのでありますが、若しも此の村に一人の司祭でもゐると云ふ事がわかつたならば澤山の人々が私の所へ押し寄せて來るでせうし、斯うなると私や私の身寄りの者一族は忽ちにして捕へられて慘酷な處刑を受けねばなりません。殊に私はいつもかくれてゐなければならぬ現狀に在り、其のために此の家の子供にさへも私の事は一切かくしてあるのであつた。處が、たつた一度だけ此のきまりを破らねばならぬ事に出逢はした。それは或日私の隣の部屋に住んでゐるお婆さんが私の家へ來て私の母と話してゐたが其の話によると此のお婆さんには九十歳になる母がまだ居て「死ぬる前には是非とも司祭に逢うて自分のつとめを果したい」と毎日神樣にお祈りしてゐると云ふ事であつた。私は此の話を聞いてすぐにも駈け出さうとしたのであるが、一應父にもよく相談した上にしようと思つて父に此の事を話して「私は司祭として、どんな危險があるにしても、老先の短い人を助けるためにどうしても行つて上げたい」と自分の立場を話して承諾を得た。幸にも其の翌日は立派な天氣だつたので私の

母が、其のお婆さんの所に出かけて行つて「今日は大へん立派な天氣ですが外に散歩に出かけませんか」とすゝめて誘ひ出し私の居る室に案内して來て「茲に居るのが司祭です」と敎へ、茲で私はお婆さんの告解を聽いて上げたのであるが、其のお婆さんは私の事に就ても嚴重に秘密を守つて其の子にさへも知らさない位であつた。そして御聖體は毎日私の家の者がかくれて運んでゐたが或る日の事お婆さんの家の人が私の所へ來て近頃のお婆さんの變り方に就て話すには「お婆さんが近頃はとても朗らかになつて年に似合はず元氣付いて來ました。いつもにこにこと何か知ら頻りに喜んでゐます」と話す人も喜びに溢ふれてゐるやうであつた。

私の部屋の下は道路になつてゐる。村の人々が往來で話す事は手に取る樣に聞えて來る。今私は茲に聞き得た事の數例を書き留めて見よう。

一、共產黨員が〇〇村に行つて一人の司祭を捕へて來た。司祭は常人と同じ服しか着てゐなかつたのにどうしてそれが司祭だと云ふ事がわかつたのだらうか。共產黨員は云ふ「私はあなたを知つ

てゐます。あなたは司祭でせう。さあハツキリ答へて下さい。若しあなたが白狀して下されば私達は何もあなたに惡い事をしようとは思ひません」と云ふので、司祭も稍安心して「はい私は司祭です」と云つてしまつた。「それでは今一寸用がありますから此の自動車にお乘りなさい」と共産黨員は云ふ。暫時走らして自動車が或る淋しい所に差しかゝつた時「一寸降りて下さい。彼處に行くのです、さア早く、先に歩きなさい」とせき立てゝ先にやり司祭が程よい遠さに隔つた頃を見計つて彼等は背後からそれを狙ひ擊ちして殺してしまつたのでした。

二、或る所では司祭が捕へられて緩刑に處せられじわり〳〵不斷に苦しめられて見る影もなく瘦せ衰へ全身の傷は紫色に腫れ上り渴を訴へて水を望めば彼等は司祭を繫り上げて身體中に水をかけながら一滴の水をさへも其の口に入れてやらうとはしない。何と云ふ慘酷さであらうか。司祭は此の苦しみの中に遂に悶え死んでしまつた。

三、一人の自動車運轉手は共産黨に捕えられて强制的に黨の爲めに働かせられた。彼の語る所によれば「私のために一番苦しい事は私に司祭樣たちをいぢめさせる事であります。先日の事でしたが二人の司祭が私の自動車に乘せられて人通り稀な田舍道に連れ出され頃合を計つて車から降されると、共産黨員の或者は『此の附近でやつつけよう』と云ふし、他の者は『まだ少し早い、もつと遠くへ行かう』と云ふ、こんな會話を五、六回も繰り返して司祭の心を苦しめ焦燥して置いて殆んど嬲り殺し見たいな風にして路上に倒してしまつた。」さうである。

四、或晩には〇〇村の信者の家に二人の黨員が突然に訪れて其の家の主人に對つて「あなたの所に若い人が居る筈ですが（これは此の家に先頃から隱れてゐる修道士を指してゐるのである）其の人は今何處に行つて居りますか」と訊いたが主人が躊躇して答へないので、二人は急に「いや何も恐れなくともよいのです。私達は其の人の親から賴まれて來たのです。これ茲に此の通り二通の手紙を托されて來てゐます」と言葉巧みに云ふものですから、主人も「それでは一寸待つて下さい」と修道士の居る所に行つて此の事を話したものだから、修道士の方でも之を信じて出て

來ました。そして此の二人と一緒に自動車に乘つて出て行つたが暫時して自動車の行つた方角に當つて鐵砲の音がしたので「ハツ」と、何かは知らぬが胸の轟を感じて私たちが駈けつけた時には彼の修道士は路上に倒れ其處には先刻の自動車も誘ひ出した二人も影さへなかつた。

五、私の居た隣村では、共産黨員が菓子屋に闖入して來て其處の奥さんに「主人は何處へ行きましたか」「さア何處へ行つたのでせうか、もう早くから出てゐますが」「長男は何處へ行きましたか」「矢張り主人と一緒に行つたのでせう、私には分りません」「さうか、よしッそんなら此の子供を殺してやる。どうしても此處のカトリツク信者の誰かを殺さねばならないのだから」と、泣いて縋る母を蹴飛ばして其處に居合せた十五歳になる此の家の少年を遂々殺してしまつた。

六、又次の樣な蠻的な事もあつた。

一人の父が捕へられて食に餓ゑてゐた。そこに黨員の一人がやつて來て「どうですか、お腹が空いたでせう。こゝに肉を持つて來ました、喰べなさい……どうですか、おいしいでせう」。

と一皿の肉を與へた。空腹に耐えかねてゐた此の父は、貪るやうに之を喰べ「實においしいです」と感謝すれば、此の黨員はカラ〳〵と打ち笑ひ「うまい筈だ、其の肉は先刻殺された汝の子供の肉だもの」。父はこれを聞いて驚ろきの餘り其の場に打ち倒れて其のまゝ息が絶えてしまつた。

斯うした種類の話は聞かうと思へばどれだけでも澤山聞くことが出來る。私が二階の室から聞いてゐてはつきりわかつただけでも一寸の間にこれだけあるのでした。斯んな空氣の中に身を秘してゐる私が、どんな氣持であつたかは讀者の皆さんには容易にわかつて貰へると思ひます。

此の頃ビスと云ふ處にリヤード と云ふ熱心な神父が居りました。此の人はお說教が大へん上手だつたので方々に招ばれて默想會の指導等をして居られた。此のためにも誰からも心からの好意が寄せられ又隨つて評判も大へんよい人であつた。然し革命騷動が勃發してからは司祭に上下の區別はない。司祭なるが故に殺さねばならぬと云ふ嚴重な密令があつた。斯うした際には却て熱心な司祭である程が眞つ先に殺されるのは當然の成り行きであつた。此の例はリヤード神父の場合にも洩

れるわけには行かなかつた。即ち神父も捕へて殺さねばならぬと云ふ事になつて黨員の一人が神父の許に宣告を傳へに行つた。さうすると神父は大へん喜んで感謝するのです。不思議に思つた黨員は、或は神父は氣が違つたのか宣告を感違ひしてゐるのではないだらうか、と思つて「これは死刑の宣告ですよ、あなたは死ぬる事は恐くないのですか」と不審がると、神父は「いやちつとも恐い事なんかありはしない。一寸待つてくれるなら其のわけを話して上げませう」とて次の様な事を語り出した。

「私は常に不斷に神に對して三つの恩惠をお願ひしてゐたのです。其の第一の恩惠は私自身の靈魂の助かりに就てであつて之は人間誰しも最も大切な處でなくてはならぬ。此の恩惠をあなた方から與へて下さる死によつて頂くことが出來るでせう。第二はイエズス・キリストによつて血を流す事でした。あなた方は今私を殺さうとなさつてゐます。それで私の此の願ひは今叶へられようとして居ります。何と大きな喜びでせう。第三の恩惠はまだ頂けるかどうかわかりませんが、私の死によつて一人の靈魂が救はれてくれる事です。私が死ぬると云ふ一事によつて一人の靈魂が地獄に陥ずに天國に上る事の出來ますやうに。今若しあなた方の中から此の助け上げらるゝ靈魂のある事を神様が見出して下さるなら、私はどんなに嬉しいかわかりません。私は心から斯うした氣持で感謝せずにはゐられないのです」

と云ひ終るや、共産黨員の中から一人の若者が進み出て、持てる鐵砲をば神父の前に投げ出し「其の一つの靈魂とは私のことです。おゝ神様よ私の罪を許して下さい。神父様、私はキリスト様の御爲めにあなたと一緒に致命致したう御座います」と跪まづけば、其の他の黨員は非常に怒つて遂々此の二人を銃殺してしまつた。私は自分の隱れてゐる所で斯うした話を聞きながら日毎、事毎に神に自分の一命を献げる祈りを熱くせずにはゐられないのであつた。

或日バルセロナから、私たちの住んでゐる家に人が來て、私の家の人々も殘らず革命の指名簿に載せられてゐる事を告げた、斯うなれば私たちも最早やこんな所にじつとしてはゐられない。

早く逃げなくてはならぬ。私たち一家四人の者は此の困難な立場をどうしたら切り抜けらるゝかの相談に頭を惱した。

第五章

私は本當はバルセロナに歸つて其處で人のために大いに働きたいと思つたのだけれど、バルセロナから來た人は「あなたがバルセロナに歸つて見た處で、其處では何にも出來ないでせう。何をする暇もなく殺されてしまふでせう」とすゝめるので、强つてバルセロナ行もならず、機會を見て國境を越えフランスに逃げるより外にいゝ工夫も浮ばなかつた。今は十二月の中旬だから年末にならないうちに之を決行しなくてはならぬ。若し此處で年を越すやうな事にでもなればきつと見つけ出されるに違ひない。さればと云つて私の足はまだ十分には癒つてゐない。醫者は絶對安靜を强ひてゐる程である。然し仕方がない。私は一切を我が神に委ねて其の月の二十三日此處を出發する決

意を固めた。私に此の旅行の決心をさせたのは、私を守つてくれてゐる人達に、餘り心配をかけたくなかつたからである。私はすぐに仕度に取りかゝつた。やがては兄たちも私の後について來る事になつてゐるので、其の不在中の家族の事に就ても色々と考へて置かねばならなかつた。種々の困難は思はぬ處から次々と湧いて出で所詮自分の力で安全を期する事は出來ないと思はれる。一切を神に委せ神に縋るより外には思案も方法もない。私は神の祝福を祈る爲めに最後のミサを立てた。此の家に宿つてゐる人々は子供を除いては皆此のミサに與つたが今日まで私が司祭である事は秘められてゐたので私がミサを立てると云ふ知らせを受けた此の家の泊り客は、とても喜んで告白をし聖體拜領をした。此の日は恰も極月二十三日私が此の土地を離るゝ豫定の日に相當してゐたが、感激深い此のミサが終つてからミサに預つてゐた中の一人はすぐに出發して隣村まで出向き、そこで私たちを待つ事にした。それは私達が此處を出る事はとても要心しなければ若しも誰かにでも見つけられようものならそれが終ひだと云ふ危險が伴うてゐたからであつた。

それで、他にもう一人の人が高い所に上つて檢べて見て若し誰も居ない、危險がない、と云ふ事がわかつたら光を示す事にした。其の夜私は其の光を注意してゐると遙かに光を望むことが出來たので、こつそり脱け出さうとすると、何と云ふもどかしい事であらうか、足の傷がとても痛み出して動けさうにない、焦れば焦る程、痛みは强まり、心の燥立ちと傷の痛みで不安失望のドン底に陷らうとした。あゝ私は此の時程苦しんだ事がない。私は天主の扶助を信賴し心を鎭めて一心に熱禱を獻げた。心の落つきを取り戻すと共に痛みも漸く輕やいだので此の機を逸せず光のある所まで行き、其の友と一緒に一キロばかりも川端に沿うて進んだ時一臺の自動車がやつて來て私たちの傍に止つた。それには兄や兄の子供たちが澤山乘つてゐたので、私は容易に其の中にかくれて隣村で待つてゐる人の所まで行くことが出來た。そこで私は子供と運轉手とに「こゝまで見送つてくれてほんとうに有り難う。私達はこゝからクリスマスの御祝で親類の家に行くのですから、もう此處までで御歸へりなさいね」と簡單に話して還して置いて、愈々安全地帶への逃避行に移

らうとした。が私は出來る事なら騾馬にでも乘つて行きたい。足の痛みも今では殆んど忘れたやうではあるが先を急ぐ旅の事でもあるし、と思つて騾馬を探したけれどどうしても見つからない。そればかりでなく同伴の人も「そんなものを伴れて歩くのは危險だ」と云つて止めるものだから、私も思ひ切つて歩くことにした。稍暫時進んで案内をしてくれる人の待つてゐる筈の所まで來たが生憎尋ねる人はゐない。待つてゐてもなか〳〵戻つて來ない。それで此處に來るまで案内してくれた人が其の人を探しに行つて漸くつれて戻つた。其の人は「あなた達ですか○○へ行く四人の方は」と問ふので「さうです、あなたはどなたですか」「私はあなた方のための案内人なのです。永く此處に待つてゐたけれど、四人連の筈なのに五人なものですから私は匿れてゐたのです。あの人は一體誰ですか」と私たちを此處まで案内してくれた人を指すので、其のわけを話して納得させ、そこで漸く此處を出發する事が出來ました。

だん〳〵進んで國境近くになると峠があつてこれを越へなければならぬ。道が登るにつれて月の

光が私たち一行の影を浮き出し、危險此の上もない。他の人たちは足も丈夫であり山道に馴れてゐたのでさつさと登つて行く、私は荷物一つ持たないのに中々足が捗らない。それでもどうにかかうにか皆の人の後について行く事が出來、四時間餘りもかゝつて夜半の二時過に山の中の一軒屋に辿り着く事が出來た。然し眞夜中の事とて此の家の人は皆眠つてゐたが案内の人が漸く起してくれて私たちを此の家に導き入れた。此の家の主人は大へん親切に私たちをもてなしてくれたが、それでも彼は私たちに對してとても疑ひ深い態度で接してゐたが、それには斯うしたわけがあるのだつた。卽ち彼は國境に居て兩國からの密貿易の仲介をなしてゐたので自らまわし根性が強くなつてゐたからであつた。それで私たちが斯うした山道に馴れないために大へん疲れてゐるのに彼は「あなた方がフランス側に越えたいのなら自由にお出でなさい私はたゞ、今晩あなた方をこゝにお泊めして上げるだけは致しませうがそれ以上の事は出來かねます」と先づ災難にかゝらぬやうに豫防線を張つて來るのです。それで私は「然し案内をしてくれる人が居ませんなら私共はとても向側に越える事は出來ますまい」「それは私に何の關係もありません。あなた方御自身でお探しにならねばなりません」「でもそれはあなたがしてくれる約束ではありませんでしたか」「私？一体誰がそんな事を申しましたでせう」「〇〇さんがさう云ひましたが」茲で彼は始めて安堵したらしく、「さうですか私もこんな世話は度々して上げましたが現在では餘りにも危險な場合になつて居りますから私にはとても出來ますまい。」彼の言葉を聞いてゐるうちに私は大へん不安になつたが、種々と話してゐるうちに彼にも私たちがよくない者ではない、と云ふ事がわかつたと見えて「それでは私が二、三日前に案内人が居ると云ふ事を聞いて居たから其の人に訊いて見ませう。然し危險な場合ですから大分お金がかかるでせう」「それはかまひません」其の時此の家の主婦は私たちが可愛さうになつたらしく「〇〇家に行つてあそこで其の人の住所を問ひ合せて來て上げたら如何ですか」と見かねて口を挾んだ。彼は默つてゐたが漸く立つて「まア行つて見ませう」と云つて出て行つた。其の不在中、私は不安の遣り場がなく、「案内者は見つかるでせうか」とか

「私は歩けるか知らん」等と獨り言のやうに云つては自ら慰めてゐたが、此の家でも大へん親切に手當をしてくれて一寸の間は休むことも出來た。それから三時間程も經つてから起されて目を醒すと私の友が「主人が歸つて來たが案内者が見つかつたさうだ、やがてこゝに來るでせう」「いつ立つ事が出來るでせうか」「それは今日立てるでせう。でも少し位は休んでもいゝでせう」と云ふ。斯うして一時間程してから、人が訪ねて來て私たちに逢ひたいと云つてゐる聲が聞える。其の中、隣りの室で奥さんの聲がして「あの人たちの責任を負ひますか」「えゝ負ひます。とてもいゝ人達です、熱心にお祈りしてゐました」。何の事だかわからないが案内人が來てゐると云ふので私はすぐその室に入つて行つた。そして案内する人に「あなたが私たちを案内してくれるのですね」と云ふと、これは意外、其の人の返事は「とんでもない事です、私にはそんな危險な事は出來ません」と云ふのであつた。事の餘りに意外なのに私は落膽と云ふよりは呆れてしまつた。それに私は案内役がそれ程危險な仕事であるとはどうも考へられないので「そんなに危險な事でせう

か」と反問したら「さうですとも、もしも死刑を免れる確實な外れのない手段でもあります事なら兎に角、それでない以上誰がそんな危險な事を引受けるものがありませうか。それだのに此の危險な案内役をさせるのに僅か一千ペセタスをさへ出すのを惜しむ沒分曉漢がありますからね」と對手の云ふ事は益々私たちの心を搔き亂すのです。「どうしてそんな大金を出す人がありますか。前の人は五百ペセタスも出さうものならそれは立派に見つかると云つてゐましたのに」。押問答の末。話は遂に五百ペセタスで承知させる事にきまつた。そして條件としては「誰にも一切言はない事」であつた。賃銀は其の場ですぐに手渡した。受取つた彼は窓の方へ行つて口笛で合圖してゐたが、二、三分經つと三十五、六歳の男が訪ねて來た、見れば服裝は山を歩くためには十分の準備が整へられてゐる、これが私たちの案内人なのであつた。午前十時頃に簡單な食事を攝つて愈々山へかゝつた。

革命勃發の當初には、國境近くにゐた大勢の司祭たちは特別容易にフランス側に遁入する事が出

來たけれども、さうした事があまり多くなつたのに氣付いた政府筋では其の後急に監視の眼を嚴重に見張るやうになり民間にも被疑者を隱匿する者を恐怖させるために、熱心な共產黨員の如きは、自己に反對するやうな者は片つ端から自動車に乘せて田舍に連れ出して衆人環視の中で殺し、其の殺した理由としては「此の者は外國へ逃げようとしてゐた爲めに捕はれて斯く極刑に處せられるのだ」と云ふ事にして其の噂を立てさせてゐるやうな有樣であつた。そして私たちが今決行しようとしてゐる此の國境附近では六百人位もの人が犧牲に供せられた場所なのであつた。それで共產黨員が自動車に乘つて晝夜を分たず監視してゐるのであつた。その爲めに道を歩いて行く事などはとても不可能な事であつた。こんな場所なので冬の雪降りなどにはとても案內者なしで此の峠を越ゆる事など思ひも及ばぬ難事であるし若し又案內者を雇ひ得たにしても案內者は賃銀さへ取れば後は野となれ山となれで雇主の危險など眼中になく遁げ出してしまふ場合も決して尠くはなかつた。或時こんな事があつた。それはつひ先日の出來事であるが一人の案內人が四人の旅人を案內して國境

に差しかゝつたが其の時案內人が云ふには「もし刑事でも出て來たらこちらの方角に逃げなさい」と敎へて置いた。さうして暫時進んだ時「あつ彼處に刑事が來た」と叫んで案內人は其のまゝ宙を飛ぶ樣にして逃げてしまつた。四人の旅人はあわてゝ彼方へ逃げ此方に隱れしてゐるうちに道には迷つてしまふし寒さには堪えられなくなるし殆んど殪れさうになつた時遙かの彼方に一斬の家を見つけ出したので「やれ助つた」と思つて戶を叩けば、何ぞ計らんこれが稅關吏の官宅であらうとは。四人は遂々捕つて殺されたのだつた。然しこんな不忠實なものと云ふのは滅多にあるものではないので大抵な場合は割合に忠實に仕へてくれるもので或時には案內のために案內者自身が犧牲になることさへも往々にして出來する。

私たちが出かけた此の日は十二月二十四日の夜の事であつた。此の夜は別に何の變つた事もなかつたのに案內人は急に私に「眞直ぐに進んで下さい私は此の先の方で又一緒になりますから」と云ひ捨てたまゝ何處かに行つてしまつた。私共は先に書いた樣な出來事を思ひ出して不安に包

まれながら進んで行くと途中で一人の女の人に出會つたが彼女は私達に挨拶して何事もないやうに行き過ぎてしまつた。そんな事があつて暫時進んで行くと横合から先刻の案内人が戻つて來て「女を見ましたか。山の中では餘程用心しなければなりません。若し私が彼の女に見られるやうな事でもあると後できつと災難があるでせう。それですから私は今は彼の女に見られない爲めに一寸かくれたのでした。」

私たち一行の者は、國境線に積る萬年雪を踏んで肅々と國境に近づいて行く。私たちを包むものは永遠の謎を秘めた沈默の闇ばかり。此の時程切實に自然の偉大さを感ぜしめられた事はなかつた。やがて私共は國境林の或所に着いたが、此處で九時頃まで或人を待たねばならぬ約束がしてあつた。其の人も國境を越えてフランスに逃げる人である。待つ間の時間を生かすために私共は祈りを始めた。クリスマスの此の夜、永遠の神秘を藏む此の國境の深山中に我が主に祈りを献げると云ふ事は私たちに取つてこれ程大きな慰めが又とあらうか。祈が濟んでから私は少しばか

り聖教に就いての話をしたが、其の時案内の人が私の側に寄つて來て云ふには「御覽なさい。ズツと向ふに幽かに燈が見えるでせう。彼處では毎晩ロザリオの祈禱が續けられてゐます。あれは私の家です。今も私の妻と父と子供たちとが私たちの爲めに祈つてゐるに違ひありません」と泪にうるみながら物語つた。此の時案内人は私が司祭であると云ふ事が初めて分つたのであつた。それで私に向つて「私は本當の子供が其の親に捧げる愛をあなた方に現はして必ずフランスまでお連れすると斷言致します」と誓つた。私共も心の内に何か知ら肩の重荷を下したやうな心安さを感じて天主に衷心からなる感謝をさゞげずにはゐられなかつた。

結語

遂に待つてゐた人はやつて來た。そして其の人の連れて來た案内人はもう六十五歳の老人だと云ふが、とても元氣に溢れてゐた。これから後は此の老案内人が先頭に立つて私共を案内してくれ

る事になり、其のまゝ翌日のクリスマスの曉まで山の中を歩き續けた。私は途中で草疲れてしまつて倒れさうになつた事も屢々であつたが伴侶者の親切によつて又氣力を回復し遂々終りまで無事に歩みを續ける事が出來た。足に傷を持つてゐる私が、あの嶮峻な山道を、あの長時間に亘つて續けることの出來たのは何と云つても不思議でならなかつた。國境を過ぎてフランスの地に第一歩を印した時、人々は自ら跪いて天の一解を仰いで湧き出づる感謝の祈を献げたが人々の目には熱い涙の光らぬはなかつた。祖國を遁れた私たちには心の中に云ひ知れぬ悲しみがあつた。今も尙スペインでは共産黨の惡思想によつて同胞相喰む動亂を續けてゐる。之は全く無神的共産主義の結果に外ならぬ。スペイン國民は然しやがて偉大なる頭首に導かれて、社會不安の根原である共産主義を覆滅してしまふであらう。現在では實に夥しい犧牲を拂つてはゐるがこれも共産主義の深刻な罪惡を人類が銘記する爲めには履まざるを得ぬ一の過程であるとすれば私共はこれをも神の攝理の無邊なるものとして感謝せざるを得ないでありませう。今やフランコ將軍の戰果は破竹の

勢を以てスペイン全土に擴がりつゝあります。やがて全勝の日もさして遠くはないでありませう。私共は天王に對する忠實、國家に對する愛護を現はすために殪れた多くの英雄の前に跪いて衷心からの熱禱を献げずにはゐられません。

一九三七、七、一〇

於ベルギー

スペインを遁れた一司祭

NIHIL OBSTAT
Censor J. B. Noda. Marc. 16, 1938
IMPRIMATUR Doi arch. episc. Tokyo Marc. 16, 1938.

昭和十三年五月二十日印刷
昭和十三年五月二十四日發行

定價金二拾錢
送料金三錢

譯者　ドン・ボスコ社
印刷兼發行者　東京市杉並區八成町九〇　丸廚里
印刷所　東京市杉並區八成町九〇　ドン・ボスコ社印刷部

發行所　東京市杉並區八成町九〇　ドン・ボスコ社
振替東京六五五五六番
電話荻窪二九一四番

カトリック講話集

皆様に、ドン・ボスコ社發行のカトリック講話集をお奬めします。カトリック信者は自分の教理の理解を深めて確にする爲、又、未信者をカトリックに導くための布教用として大へん役に立つ、平易に書かれた講話集です。一ケ年を一期間とし、一期間に十二輯（一輯六十頁の小冊子）づゝ發行されます。購讀の御申込はいつからでもかまひません。一ケ年分壹圓です。

購讀料金
一ケ年一圓

發行所
東京市杉並區八成町九〇
ドン・ボスコ社
振替東京六五五五六番

カトリツク講話集・第七期の既刊

教皇使節閣下述
希望のながめ
四六版一一六頁 定價二十錢 送料三錢

戸塚文卿著
生ける信仰
四六版八十頁 定價二十錢 送料三錢

星加敏秀譯
天は讃へる
四六版八十四頁 定價二十錢 送料三錢

フェデリコ・バルバロ譯
小殉教者
四六版八十頁 定價二十錢 送料三錢

マルジヤリア編
聖會小史
四六版九十頁 定價二十錢 送料三錢

發行所 東京市杉並區八成町九〇 振替東京六五五五六番 ドン・ボスコ社